

## ザ・チャレンジ

(大学受験編)

「2018年問題」をご存じだろうか。日本の18歳人口がこのころから再び減少し、大学淘汰の時代がやってくるというものだ。

大学の入学者数は、18歳人口と進学率に左右される。

18歳人口は、団塊ジュニアの多くが高校を卒業した1992年度の205万人をピークにその後は減り続け、2014年度は118万人。全体の人数は減ったが、大学進学率は1990年代の30%台から50%へと上昇した。このため、私立の四年制大学の数が1992年度の384大学から2014年度の603大学まで増え続けたにもかかわらず、大学経営は何とか持ちこたえられてきたのだ。

だが、淘汰の波はすでに押し寄せてきている。日本私立学校振興・共済事業団が発表した「平成27年度 私立大学・短期大学等入学志願動向」によれば、入学者数が入学定員を下回る定員割れの私立大学は250校、全体の43%に達している。

### A. 入学者数減り消滅の危機も

## Q. 「2018年問題」で大学どうなる？

一方で「入学定員充足率」が100%を超えている大学もある。入学者が多ければいいというわけでもない。文部科学省は、大学に対して適切な教育環境を確保するよう改善を求めるとともに、来年度から、私立大等経常費補助金が不交付となる定員充足率の基準を厳格化することを決めた。

「大学全入時代」を迎え、大学間格差が拡大傾向にある今日、受験生は自分の将来を考え、大学・学部選びを慎重に行うことが必要だ。さもないと自分の母校が近い将来、消滅の危機を迎えてしまうかもしれない。

ここに衝撃的な資料がある。大学の「設置計画履行状況」について文部科学省がまとめた昨年度分の調査結果。大学運営に問題がある、いわば「ブラック大学リスト」だ。今年2月に公開されており、ウェブの検索エンジンで「設置計画履行状況等調査の結果等について（平成26年度）」と検索すれば出てくるので試してみよう！

253大学がリストアップされ、「入学定員充足率が0.7倍未満となっているので学生の確保に努めること」「定年を超えた専任教員の割合が高い」「入学定員超過の改善に努めること」といった改善意見に加え、「英語Ⅰや基礎数学など、大学教育水準とは見受けられない授業科目がある」「授業内容や評価方法等の妥当性に懸念がある」など大学に対する「徹底的なダメ出し」が行われている。

こうした現状を考えると、2018年問題は、大学を本来の意味での「高等教育の場」に戻すには避けては通れない道なのかもしれない。（CG高等館 東進衛星予備校）

※幼児教育から各段階の進学対応まで、多様な学び、の情報を紹介。次回は小学校受験編。



CG高等館 東進衛星予備校各校舎で無料配布される大学進学情報紙「トーチンタイムズ」。10月1日号では、受験生のセンター試験までの各科目の伸びを分析。